

2016年11月7日

札チャレラジオ通信 第43回

赤坂：三角山放送局をお聴きの皆さん、こんにちは。札チャレラジオ通信です。私はパーソナリティーのNPO法人札幌チャレンジドの赤坂です。よろしくお願いします。札チャレラジオ通信は『自立を目指す障がいのある人がITでマザル・ハタラク・拓き合う社会を創りたい』との思いで活動しているNPO法人札幌チャレンジドが、毎週月曜日のこの時間に札幌チャレンジドの活動内容をお伝えする番組です。2016年、1年間放送します。今週は就労移行支援グループの赤坂と大山が担当します。大山さん、よろしくお願いします。

大山：よろしくお願いします。

赤坂：札幌はですね、この週末に雪がとても降りまして。

大山・筒井：はい。

赤坂：多分大変だったと。今ゲストの方が「はい」と言ってくれましたが、すごい雪が大変ですね、通所されているメンバーさんたちも結構通ってくるので大変だった方々もいたかなというところですね。では、早速ですね、今日のゲストのご紹介をしたいと思います。今日のゲストは札幌チャレンジドの就労移行支援サービスを利用されている筒井裕子さんです。筒井さん、こんにちは、よろしくお願いします。

筒井：こんにちは、よろしくお願いします。

大山：お願いします。

赤坂：お願いします。では、まずですね、自己紹介をお願いします。

筒井：はい、ラジオをお聴きの皆さん、こんにちは。私の名前は筒井裕子と申します。生まれつきの全盲です。そして未熟児網膜症で生まれました。普段は白杖を使用して日常生活を送っております。

赤坂：はい、よろしいでしょうか。今日はですね、筒井さん、点字のちゃんと資料も用意してですね、今それを読みながら自己紹介をしてくださったんですけども。筒井さんは全盲ということですね、いつも白杖について、今日もですけどもね、公共の交通機関などを使

っていつも通所していただいていますね。はい、ありがとうございます。では、その札幌チャレンジドに通所することになった経緯を教えてください。

筒井：はい、昨年の8月ぐらいだったと思うんですけど、私は市外に住んでいるんですが、障害者のための就労相談室っていう相談室が開設されたんですが、その相談室の方のご紹介いただきまして、ここを知ることになりました。

赤坂：はい、それでですね、今年の4月からですね、筒井さん。なのでもう半年経ってるんですけど、いつも毎日元気に通所していただいていますね。はい、ありがとうございます。では、次の質問なんですけど、移行支援の訓練のプログラムの中でですね、筒井さんが今一番、自分に役に立ってるなと感じてるものは何でしょうか。

筒井：いつもですね、毎回ここの札チャレさんでは実務訓練っていうのを行ってくださってるんですけども、たくさんの訓練をさせていただいているんですけど、その中でテープ起こし作業っていうのをさせていただいているんですね。皆さんご存知か分からないんですが、テープ起こしはいろいろな、例えば何か講演会ですとか、こういったラジオ放送ですとか、そういった音声を聞きながら、それをパソコンで文字を起こしていくっていう作業なんですけども。そのテープ起こしの作業と、あとそれから視覚障害者にとっても特化した講習だと思うんですけど、いろいろ漢字ですとか、そういったものを勉強させていただく視覚講習という講習がありまして、その講習がとっても有益だなというふうに感じております、はい。

赤坂：はい、ありがとうございます。まずテープ起こしのほうなんですけど、さっき筒井さんが説明してくださった通りですね。講演会とかのしゃべっているものを文字に起こしていくっていう作業なんですけれども、札チャレラジオ通信はですね、いつも札チャレのホームページに音声と、あとその文字起こしした文章のやつですね、アップするんですけども、その起こしもですね、移行支援のメンバーさんをお願いしてまして、筒井さんにもこすずっと結構お願いしてますよね。

筒井：はい。

赤坂：毎回毎回お願いしてまして、今回の放送もこの後きっと筒井さんか誰かが文字にしてくれるんだと思うんですけど、すごくいつも楽しくやったださってですね、すごく正確でいつも助かっているなというところですね。で、漢字の学習の、さっき言っていた視覚講習っていうのは、「視覚障害」の「視覚」って書いて「視覚講習」ということで、視覚の方に特化したっていうか、その方だけの講習ということで、大山さんが担当してくださっていますね。

大山：そうですね、今、させていただいています。

赤坂：漢字の勉強ということで、そこが今、筒井さんはとても楽しいということですよ。

筒井：はい、そうですね。どうしてかという、結構点字っていうのは漢字の機能がない文字なんですね。表音文字みたいなものなんです。それでいろいろな文字を書くときに、もちろんその確定するにあたって、いろいろ決定をしていくんですけども。例えばその文字が「箸（はし）」と書いて書いたときに、「食べる箸（はし）」とか言ってくればいいんですけども、すぐ「この「箸（はし）」は「食べる箸（はし）」で大丈夫だな」と分かるんですけども、言って説明してくれているものが必ずしも連想できないものが結構あるんですね。例えば、「劇（げき）」って「演劇の劇（げき）」っていうものを打ったときに、「劇薬の劇（げき）」とか、そういうふうに発音されてしまって、これを選んだらいいのかどうかよく分からないときがあるんですけども。

赤坂：あれですね、音声読み上げのソフトが。

筒井：ええ、音声読み上げのソフトですね。そういったものを勉強させていただいて、そういった講習なんですけど、とても役に立っていますね。

赤坂：そうですね、漢字とかがって私たちもそんなに普段意識して考えてたりしないんですけど、確かに「劇薬の劇」もそうですね。そういうふうと言われると確かに、イメージ、パッとつかないかもなと思ったりもしますね。毎日何か驚きの。

筒井：そうですね、驚きの連続で。そのテープ起こしをする中であっていろいろ分からない漢字が出てくるんですよ、改めて聞かれると。で、それを分からないときに国語辞典を調べて、インターネットの goo 国語辞典を調べていろいろ勉強させていただいて、こっそり「この字はこういう漢字なんだな」ということを勉強させていただいていますね。歌手の名前とかも改めて聞かれると分からないことがあるんですけども、普段目で見えていないものですから。ですので、そのオフィシャルサイトとかをインターネットで調べて勉強させていただいているんですよ。

大山：普段あまり気にしていないですものね。例えば、さだまさしさんもね。「さだまさし」という字が平仮名だったとか。今日は May J.さんの「May J.」っていうつづりを調べて。ちゃんとテープ起こしの時に調べて、それで起こしてくださっているの、すごいな、と。それで実践で見ながら、起こしてくださっているんですよ。

筒井：そう、とても実践できますね。

赤坂：はい、ありがとうございます。ではですね、次はちょっと唐突な話題に移るんですけど、ちゃんと意味があります。

筒井：意味があるんですか。

赤坂：この後に意味があるんですけど。筒井さんのご趣味は何でしょう。

筒井：趣味ですか。趣味はたくさんあるんですが、強いて言うとバイオリンを弾くことが趣味です。小さいときからやっけていまして、今でも続けております。

赤坂：はい、そうなんですね。バイオリンは何かきっかけがあって初めたんですか？

筒井：バイオリンは、テレビからバイオリンの音が聞こえてきて。4歳の時だったんですけど。それでその音がとてもいい音で、「これは何の楽器？」って感じで聞いて、それがきっかけでバイオリンをしたいと言ったら、祖母がバイオリンを買ってきてくれて。そこからバイオリンを始めて、母と先生と私と3人で始めたバイオリンだったんですけど、すごく小さいバイオリンだったんですね、ウクレレみたいな大きさの、手のひらに乗るくらいの大きさの。で、今は大人サイズのバイオリンを使って、中学校一年生からずっと使い続けていて。あと、その3人の世界だったのが、続けていることで今はたくさん仲間達ができ、そういう広がりを持っています。

赤坂：何か演奏会とか発表会とかも、結構やられているってということで本当にすごいですよね。ということですね、何でこんな質問したかということ、この後いつもはゲストの方にリクエスト曲をお願いしているんですけども、今日聴いていただくのはですね、筒井さんがお友達と演奏している曲ということで。筒井さん、今日のその曲について教えていただいてもよろしいでしょうか。

筒井：今日、演奏させていただく曲はドボルザーク作曲の「ユモレスク」という曲です。皆さん、きっと音楽のレコード鑑賞の時間とか、小学校とかで一度か二度は多分お耳なじみのある曲じゃないかなって思います。ドボルザークの逸話読んだことがあるんですけども、蒸気機関車をイメージして作った曲だそうで。蒸気機関車ってなかなか発車するのに時間がかかりますよね。発車するまでのその時間のかかり方、シュッシュッポッポって感じで始まるそのイメージで最初は始めて、伸び伸びした郷愁、ふるさとを思いながら、そういう

真ん中のゆったりした部分とか、そういうのをイメージして作ったっていうふうに私はずっと習いました。そういう「ユモレスク」です。

赤坂：今日聴いていただくのは、お友達がピアノを弾いていて筒井さんがバイオリンを弾いているっていう。

筒井：はい、そうです。二年前の演奏です。

赤坂：二年前の演奏なんですね。私は事前にですね、聴いていたんですけど、とっとうまくてですね、びっくりしていたんですけど。それを今日はですね、皆さんに聴いていただきたいと思いますので。では、よろしくお願いします。

赤坂：3時からお送りしています札幌チャレラジオ通信です。今日のゲストは就労移行支援サービスを利用されている筒井裕子さんです。筒井さん、後半もよろしくお願いします。

筒井：はい、よろしくお願いします。

赤坂：後半からはですね、大山さんにちょっとバトンタッチをして、いろいろ質問をしていただきたいと思いますので。大山さん、よろしくお願いします。

大山：はい、よろしくお願いします。ではですね、また質問なんですけれども、今年の4月から就労移行支援サービスを利用されているんですけども、利用してからですね、ご自分の中で何か変わったなと感じることはありますか。

筒井：ここにはさまざまな障害のある方々と触れ合う機会が与えられたっていうのが、自分の中でとても変わった、違うところだなと思ったんですね。そしてその違いを通して、いろいろな方たちのことを理解するであるとか、尊重するということの大切さを本当に普段から、小学校の頃、あるいは幼稚園ぐらいの時から道徳の時間にね、本当に当たり前のように、これは大切なことなんですよっていうことを聞かされてはいますけども、そのことをとても実感させられる。日々の生活の中で。そのようなことが変わってきたっていうふうに思っているんです。

大山・赤坂：うんうん。

筒井：そして一番心に残っていることが、あるときに車いすの方が私のちょうど向かいというか左側、真向かいではないですね、10時ぐらいの方向にいらしたときに、私が歩いていたら、ちょうど車いすの車輪が足に当たったことがあったんですね。で、そのときにふと思ったんですけども、「もしかして私の持っている白杖とか普段使っているものが、ひょっとして当たることもあるかもしれない、この車輪に」っていうことを思って、そのことを聞いてみたんです、その方に。そしたら、「そういうことは、実際に危ないことがあるよ」っていうふうに聞いたりとか。あるいは2分間スピーチっていう、朝の朝礼のときにある方がおっしゃってくださったんですけども、その方は普段、身体（しんたい）に障害を持たれていて、杖を使って歩いてらっしゃる方なんですけど。私にとってはとても便利な点字ブロックなんですけども、そういう方たちにとっては、あるいは車いすの方たちとか、そういう方たちにとってはそのものがとてもバリアであるということを教えてくださって、そのときにハッとさせられて。で、その方の2分間スピーチでは、そういった白杖を使っている視覚障害者、それからそういった身体（しんたい）の方たちにも両方にやさしい点字ブロックが今開発されているところであるっていうような話を聞いて、本当に一人一人が分かり合うということは意味が深いなあということを思いまして。こういう、人を理解するとか尊重し合うということの大切さとか深さみたいなものを改めて考えさせられて、いつもいつもそのことは心に留めながら歩んでいきたいなあっていうふうに思う気持ちがさらに増したということが変わったことかなあというふうに思います、はい。

大山：はい、ありがとうございます。そうですね、障害のある方でも、身体（しんたい）の障害といっても上肢下肢、あと視覚障害の方もいらっしゃるし、難聴の方もいらっしゃるし、あとは内部障害の方もいらっしゃいますし。発達障害、精神に疾患を持った方とか。うちの事業所はいろんな障害を持った方がいらっしゃるんで、その中で本当にお互いを尊重する、今筒井さんがおっしゃってくださった、認め合って尊重し合っていくっていうのがやっぱりベースにそれがあると、いつも皆さんがね、こうね、何ていうか、自分のこともそうなんですけども、相手のことを考えつつ行動するというのが自然とできるようにというか、自然と自分の行動に表れていくというのがありますので。それがすごい、私たちも素敵だなあと思って、いつも思っているんですけどね。

筒井：プログラムの中ではグループワークであるとか、そして力を合わせてみんなでいろいろなことを考える時間があったりですとか。一番感じるのが、例えばお掃除の時間にそのことを感じますよね。車いすの方と一緒に掃除をする機会が与えられたりして、そういうとき、あるときは相談させていただいて誰がどういう役割を果たしたらいいのかとか、それを相談することができたりして。

大山・赤坂：うんうん。

筒井：すごく新しい経験？発見？はい。

大山：大事なことですよね、お互いにそうやって相談しながら、お互いができることをお互いが補いながらですね、難しいことは補いながらやっていくっていうのが、とても大切なことですね。

筒井：私がお掃除のときにバケツに水を入れて運んだときに、ある方がすごく喜んでくださって。そのときに自分が思ったのは、自分は今まで持っている自分の力とかをどれだけ大切に扱っていただろうなあっていうことで。自分の持っているいろいろなこととか、そういったものをやっぱりもっと大切に扱うべきなんじゃないかなあと。他人を尊重するだけではなくて、自分の今持っているものとかをどれだけ自分は十分に扱っているだろうかというのを、そういう中からも学ばせていただいています。

大山：はい、ありがとうございます。すごくうれしいですね。そういうことをね、私たちも毎日毎日、そういう皆さんの、そういう姿を見ながらですね、こんなことが表現できるようになってきたんだなあとか。やっぱり他の利用者さんとかでもですね、最初にいらっしゃったときに、どうしてもなかなか気持ちが開けなかつたりとか、自分の心を開けなかつたりっていう方もいらっしゃったりするので、そういう方たちが少しずつ少しずつ、自分のことを認めつつ自分を出していけるようになってきたりとか、皆さんと関わりたい関わりたいって気持ちを強く出せるようになってきたりとか、そういう姿を見てるとすごくうれしくなってきましたよね。なので、いろんなことをご自分で発見していくというか、気付かれていくっていうのがすごくうれしいなあとと思いますね。ありがとうございます。ではですね、筒井さん、今移行支援に通ってもう半年ぐらいになりましたけれども、今後の目標があれば教えてくださいなさいんですけども。

筒井：はい、今後はですね、先ほども申し上げましたけれども、テープ起こしとか視覚講習を通して、目の見えていらっしゃる方、晴眼者の方たちにとっても見やすい文章作成ができるように、あるいはなるべく誤字の少ないであるとか。今日も視覚講習をさせていただいたときにお話し、ご相談させていただいたんですけども、レイアウトとかもやっぱりその点字の世界と普通の目の見えている方との文字の世界が全然違うので、そういったことも少しずつ少しずつ学ばせていただきながら、なるべく目の見えている人にとって見やすい、見てもらえるような読みやすい文章作成ができるようになることが一つと。あともう一つの目標は、自分の得意な分野とかを生かして、自分の今後の就労に生かしていけるようなこと

ができたらいいなあっていうふうに思っています。

大山：ありがとうございます。筒井さんはバイオリン以外にも英語とかもお得意なので。

赤坂：そうですね。

大山：そういう国語とか英語とかの力を生かして、就職の方もいろいろ進めるといいなあと
思っているんですけど。

筒井：テープ起こしが大好き。

大山：すごく本当に、素質があるって言ったら、私が言うのもアシなんですけれども、とても速く覚えてくださってですね。もともと文章を書くのがとてもお好きなので、すごい理解していただけるのが速かったので、すごいうれしいなあと。今ラジオ起こしも、この札チャレラジオ通信もたくさん起こしていただいているんですけども。漢字もですね、すごい覚えたいっていう気持ちがとても強いので、どんどん吸収していったんじゃないかなあと思うんですよね。私たちは同音異義語っていう、普通に同じ読みの言葉を、漢字が見えているので、この意味があるっていうのは分かってやっているんですけど、そこを音声のソフトを使いながら選択していくっていうのは、なかなか難しいですけども、それでも頑張ってくださいしています。これからもよろしくお願いします。

筒井：よろしくお願いします。


大山：はい、ありがとうございます。

赤坂：はい、ということですね、この音楽が流れてきたので終わりにいくんですけども。今日初めてのMCだったんですけど、ちょっと緊張してしまって、どうもすいませんでした。

筒井：いいえ。

赤坂：ということですね、今日は札幌チャレンジドの就労移行支援サービスを利用されている筒井裕子さんにお越しいただきました。筒井さん、ありがとうございました。

筒井：ありがとうございました。



赤坂：それでは来週も移行支援グループの放送に入りますので、はい。ではまた来週、お会いしましょう。さようなら。

大山・筒井：さようなら。